今月の読み物

材木屋の独り言 ー 序文

材木史郎

私は長年、木材を販売してその木材によって利益を出して？生活させてもらっているのに樹木の事をほとんど知らない。林業は木を伐採し新しい苗を植える。製材業はその丸太を製材して製品にして送り出す。問屋、市場は製材された四角い木材を販売する。森林が健全に育っているのかあまり関心がなく歩留りだとか、その木を扱ってどのくらい利益がでるか、儲かるのか、商売に必要な木材だけを欲しがる。そんな考えで良いのだろうか、「ボーっと生きてんじゃねーよ！」ってチコちゃんに叱られそう。もっと木に感謝して商売しなくてはいけない。だから儲からないでアップアップしているのだ。そうだ、木の事をもっと知ろう、勉強しよう。

それでまず身近なところで新入社員歓迎会の記念品に入っている『木材大辞典185』を真剣に読んでみた。

あれ？2008年に170種で発行され、2013年に15種増えてたった5年でこんなに新しい木材が？世界中の植物の種類は35万～150万種の間だろうといわれている。ずいぶん大雑把というか開きが大きすぎる。なぜというと、次々と新種が発見されていることや植物の祖先である植物プランクトンが植物の分類に入るのかということが関係しているらしい。私たちが扱う木材もまだ新しい品種が出てきて、この『木材大辞典』も10年後には200種くらいになっているかもしれない。産調出版から1997年に『カラーで見る世界の木材200種』というのも出されている。アフリカ材や南米材のあまり流通していない材が載っている。その中に国産材はどのくらいか数えてみた。『木材大辞典185』は針葉樹広葉樹65種、世界の木材200種のほうは65種なので大体そんなものかと思う。

日本は雨が多く温帯地域のため森林が良く育つ。今でも国土の68パーセントが森林で世界でも有数の森林国だ。その内訳は国有林が3割、地方自治体の公有林が1割、個人、法人などが所有する民有林が6割、おおよその比率でそうなっている。

国産材の自給率がなかなか上がっていかないのは何故だろう、扱っている林業家、製材会社、問屋、市場など、なぜ利益が上がらないのだろう？輸入材との競合のせい？では輸入材を扱っているところは儲かっているの？この問題はまたの機会にします。（答えがわかれば苦労しない）

昭和30年頃、耐火建築物促進法が制定され、なるべく木材を節約してコンクリートや鉄で建築をすることを法律で定めている。丁度その頃、昭和29年洞爺丸台風によって北海道で甚大な風倒木被害が出た。これらが契機となって林野庁が「特別造林実行計画」により釧路市東北部厚岸湖に注ぎ込む別寒辺牛川の上、中流部に位置する10,778ヘクタールの国有林に造成造林した森林がある。パイロットフォレストである。この時に植林したのはカラマツでおおよそ7,000ヘクタールに及ぶ、詳しくは北海道森林管理局のホームページに載っている。

法律によって守られてきた国内の森林は伐期を迎えて市場に出てこなくてはならないのに、価格が安くてなかなか出せないでいる。「公共建築物等木材利用促進法」という法律が施行されて、昭和の時代に使うのを制限されていた木材は、ここにきて大きく脚光を浴びてもっと使いなさいと追い風が吹いてい

る。材木屋が儲かるのはこれからなのだろうか？そんな日が来ることを夢見てがんじょうします。（がんじょうとは広島県庄原市の方言で「労を惜しまず努力する」）

次回はもう少し突っ込んで面白い木の話を書きます。お楽しみに。

望楼から眺めた現在のパイロットフォレスト
出典：北海道森林管理局
http://www.rinya.maff.go.jp/hokkaido/kusiro_fc/pilotforest/index.html